RRR(ローリングローリングロール)

二奈本 嘘蔵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＲＲ（ローリングローリングロール）

【Ｎコード】
Ｎ９４９８Ｇ

【作者名】
二奈本　嘘蔵

【あらすじ】
普通の高校生エンコジが様々な人間の中で大忙し振り回されていると思っていたが実は自分が渦の中心にいる事に気づく果たしてバンドはうまくいくのか！？プロローグ無視で第一話から読んでもらったほうが嬉しい最初はなんか掴めずイマイチ

プロローグ

「はぁ～、もう…円君（マドカ）
君はなんで私の授業の無い時間だけ抜け出すかなぁ」

桜庭高校の管理棟の２階
職員室の窓際で
唇の柔らかそうな見た目の若い担任の先生にため息をつかれながら
オレはニコニコしていた

目は垂れ目で鼻は小さいが少しオレの好きじゃない形だ

髪型は肩にかかる程度の緩い巻き髪
んでダークブラウンか…
まぁ小顔が最大の武器かな

うーん
スドケンの７３点はなかなか鋭いな

草鹿ナツ先生は生徒から人気のある人だ

２８歳と思えないかわいさが男子を惹き付け
明るいのに愚痴っぽいおばちゃんくささが女子の共感を得ていた

ってかやっぱ垂れ目はＭっぽく見えるよなぁ
オレもＭっぽく見えるって言われるし

「円君聞いてる？」

ニコニコしながら全っ然違う事を考えていたオレに垂れ目の童顔が困っていた

「かまってほしいんスよ
オレ草鹿先生の事好きだもん」
悪びれもせず照れすらせずニコニコしながらそう言うオレに草鹿先生は呆れた笑顔で机に頬杖をついた

「あぁハイハイ
もう良いよ、まったく君は…
…また今日も分別ヨロシクね」

そこまで言うと草鹿先生は小さい声で

「…でも頼むから！
頼〜むから私の授業の無い時間だけはサボらないで！
休ませて！」
ニコニコしながら立ったままのオレに両手を合わせ草鹿先生は懇願した

なるほど好感度も上がるわけだよなぁ

「じゃぁもうかまってもらえないじゃないスかぁ」
ニコニコ顔から眉毛だけ八の字にする

このやり取りを楽しんでみようかな

初夏の暑い午前中
蒸し暑い教室とは打って変わってクーラーのガンガン効いている職員室
社会の理不尽さに一生徒として怒りを感じねばならないトコだが
今の所オレはその恩恵を受けているので
まぁ良しとする

そこでまだ草鹿先生とオレのやり取りは続いていた

懇願する先生とはぐらかす生徒

こちらの様子をニヤニヤしながら向かいの若い女の先生が見ている
事にオレは気づいた

なるほどスドケンくん！！
８０点！
あんた高得点だよ！
ちなみにこの採点はオレと友達のスドケンこと須藤賢太の独断と偏見でつけている

「もういいから！
なんだったら今度デートでもなんでもしたげるから！」

いいかげんイライラした草鹿先生がなげやりに言った
向かいの先生はビックリした目でこっちを見ている

ふと先生のパソコンの時計を見た

おう！
もう英語終わんじゃん
ラッキー
…次は音楽か音楽室遠いから早めにいきてぇな

「おぉ！良いスね！
わかりました！約束します！！
その代わり絶対ッスよ！！」

ニコニコ顔から一転、オレの顔面は目を開き口はオの形を作る

「ハハハ
君は本当に…
いつが良い？」

軽く投げやりなまま草鹿先生は言いながら引き出しを開けた
綺麗に整理された引き出しには何故かファッション雑誌が入っていた

思わずオレはニヤっとしてしまった

この人オモロいな
教師だろ？
その雑誌いいのかよ！

「キーンコーンカーンコーン」

やべぇ！チャイムじゃん！！
早く行かねば

「ん～じゃぁまたいつかで！
楽しみにしてますよ」

チャイムの音で動きだした他の教師に紛れオレは慌ただしく職員室
を出ていった
「あぁ～もう
逃がした」

机の脇のカップを手に取り草鹿ナツは頭をかいた

向かいの机
一つ年上の川本エリ
がクスクス笑っている
それに気づいた草鹿ナツは困った笑顔で話しかけた

「単純でカワイイ子なんだけどねぇ
天真爛漫過ぎて扱えないの」

頬杖をついて雑誌をめくりながら川本エリが感心する

「へぇあんたが扱えないなんてなかなかね
で
どうすんの？」

「何が？」
カップのヌルいコーヒーを飲みながら
草鹿ナツが聞き返した

「デートよ」

川本エリに言われて草鹿ナツは笑った

「アハハ
行かないよ
他の男子とも約束だけはしてるんだから
あぁ言えば言う事聞いてくれるの」

サラリと魔性な一言を言いのけて満足気に椅子によっかかる

「でもあの子は言う事聞かないと思うな」

めくっていた雑誌の手を止め川本エリはニヤリとした

「どういう意味よ」

怪訝な顔をした草鹿ナツに向かって川本エリは雑誌の一部を見せた

「…デート編
男の気の無いときの返事
…いつか行こうねと行ったら７０％その気はない…。」

固まる草鹿ナツを見て川本エリは今にも吹き出しそうだ

その頃、円（マドカ）　虎治（トラハル）は音楽室にむけて猛ダッシュしていた

プロローグのプロローグ（前書き）

投稿する順番を間違えたのでこちらからお読みください

プロローグのプロローグ

遥か高く
そして深く蒼く世界を覆う空
その中心よりちょっと東よりに鋭利な光線のような陽射しを真夏の
太陽が市内にむけて放っていた

『初夏の匂い漂う秋山市桜庭町は本日もずっと晴れの模様
…さて今日も元気に皆様頑張っていきましょう
まず最初のナンバーは…』

耳元のイヤホンからローカルラジオのおっさん（ＤＪ）が年甲斐も
無く爽やかに喋っていた

ずっと晴れかよ…
このクソ暑いのに

今日はなんとなくラジオを聞きたかった気分
新しい曲との出会いを求めてという気持ちもある

外の街路樹でがなる蝉達の声をシャットアウトするにはイヤホンは
必須アイテムだ

ただ問題は
蝉達のがなり声とともに必要な外部の音すらもシャットアウトされ
る事だ

特にホラ
授業サボって裏庭の陰で携帯カメラ片手に入道雲とか撮ってるとする

そしたら背後から向かってくる足音とか聞こえないワケです

そんなもんオレも気づかねぇよって話ですよね

んでいきなり首根っこ掴まれた日にゃ…

ってもう遅い

今たしかに先生の華奢な手がきちんとオレの首根っこを捕まえました

オレはこのまま職員室

んで放課後

ゴミ捨て場でゴミの分別っつう奉仕作業のお決まりコース

はぁ…

さよなら夏の入道雲さん

夏の風物詩の中でも1番好きなのは君さ…

首根っこを捕まれたまま職員室へつれていかれる男子と先生

その渡り廊下の様子を一人の女生徒が見ていた

実はニ年四組の窓からいつも彼の様子を見ていたのだった

第一話

深緑のあざやかな昼前
蝉の声が遠くに聞こえる特殊教室棟5階の隅そこには音楽室がある
さきほどの三時限目に入るチャイムよりほんの数分前

音楽室では
すでに移動をすませた一年三組のクラスメートがにぎやかに話していた

爆睡するものや汗を拭くもの
友達と喋るもの

その雑談の中

「おせぇな
エンコジ
またバレたんじゃね？」

背の高い長髪のイケメンがクラスの女子の視線をチラチラ受けながら隣の金髪少年に言った

「あいつ英語だけは嫌やぁ言うてたもんなぁ
なっちゃんにマークされとんのに
…アホやで」金髪をサラサラさせながら甘く苦笑いをする顔とは裏腹な関西なまりを聞き
女子達はキャァキャァ言う

みんなの会話に混ざるように後ろからタムタムとドラムの音がしている

「だからさやっぱ前の曲はサビから間奏の入りが良いよな
うん」

坊主頭のノッポがドラムの椅子に座り
目の前の小柄なオカッパに言った

「そうだね
あのフィルインからのギターソロめっちゃ気持ち良いもん」

カッパ頭はギターを弾くマネをしながらギュインギャインと言っている

音楽室の端っこであーだこーだ話すノッポとオカッパを見ながら金髪の少年が呆れた口調で言った

「あのロックバカ共
自分ら浮いてるのわからへんのやろか
っちゅうかオレのベースがあってこそのあの曲や言うに」

その言葉に長髪の美男子がフンっと笑った

「お前の髪も十分浮いてるっつの
それにロックバカなんて人に言える立場じゃねぇだろ？」

二人の美男子のオーラについに女子達が囲むように群がり出した

二人とも知らん顔をしながら喋り続けていたが

一人の女子が
「ねぇねぇ
陣内君、須藤君…」
と言った直後
音楽の教師がドアを開け入ってきた

「オゥス！
よし三組だな
あ！
こらっ勝手にドラム叩くな福田！！」

福田と呼ばれたノッポはあわてて飛びのきシンバルに当たる
シャーンと言う音が静かに響いた

音楽室を好きなように散り散りになっていた生徒たちは蜘蛛の子が
散った時の巻き戻し映像のように席についた

しんと静まりかえった音楽室にシンバルの音が微かに響いている

長髪の陣内と金髪の須藤に声をかけそこねた女子は照れ隠しから舌
打ちを
してブスっとしていた

音楽の教師井上先生が教卓によっかかった瞬間

ガチャリ

とドアノブが動いた

はっと井上がその方向を見たのをきっかけに
そーっと開くドアに音楽室の全員が目を向けた
ドアを開けたであろう人間がこちらにチラリと目だけ覗かせた
しばしキョロキョロ動かした後
パタン
とまた閉めた
気になった井上はドアに向かっていき開けてみるが
…誰もいない
体を乗り出して廊下を見渡すが
…やはり誰もいない
「なんだったんだ」
と呟きながら振り返り席に着いている生徒たちに目をやると
やたら汗をかき息を切らしている生徒に気がついた
さっきあんなヤツいたかな？
と思いじっと見るが本人はニコニコしている
ふとするとチャイムが鳴り
井上は我に返った

まぁいいか

と取りあえずクラス委員を指差し
号令をかけさせた

号令をしてから席に着いた生徒たちを確認した後

井上は教科書をパラパラと開き授業を始めたのだった

このクラスの美男子
陣内真吉(ジンナイシンキチ)と須藤賢太(スドウケンタ)その横に先程いつの間にか音楽室に入ってきていた
やたら汗をかいている生徒　円虎治
その前の席にノッポの福田林檎(フクダリンゴ)とオカッパの百瀬完太(モモセカンタ)が座っていた

円を囲む四人がニヤニヤしながら話出した

「エンコジ！
まさか本当にやるとは！だな！」
ノッポの福田林檎が細い目を笑った顔でさらに細くして言った
「あれは使えるぜ
いつか使う時が来たらオススメする
でもバレんなよ？」
円　虎治ことエンコジは汗で濡れた前髪をかきあげながら言った

なんでエンコジと呼ばれているかは名前をよく見たら解る

「リンゴでかいからバレるて
モモカンならバレへんのちゃう？」

須藤賢太にモモカンと呼ばれた百瀬完太はヒヒヒっと笑った

ではそろそろエンコジ神出鬼没の謎を解明しよう

それは簡単な話で音楽室をよく見渡してもらったらわかる

入口は北の左側1番手前

音楽室の東と北側は廊下に面していて窓がついている…

要は先生が廊下に出た途端エンコジは死角になっている廊下と面している東側窓から入ったのだ

ちなみに真相を知らないのは井上教諭だけ

実はクラス全員この様子をクスクス笑って見ていたのだった

「あ！

てかツナ！！

新曲のイメージ出来たんだ！！

今日お前ん家行くぜ？」

長髪の美男子陣内真吉ことツナは

「ん。」といって下敷きで顔を扇いでいる

陣内真吉がツナと呼ばれ出した大きな原因はとなりのスドケン＝須藤賢太の一言からだった

「シンキチてなんかシーチキンみたいやんな」

「…。」

一時シーチキンと呼ばれていたが長いためツナに改名したのだった

第二話

今は楽しい楽しい音楽の時間
クラシック鑑賞は主にみんな爆睡する時間なのだ
それは男子女子関係なく興味ないものは皆該当する
しかし中には聴き入るものもいた
さきほど英語の時間にリフレッシュをかましたエンコジだ
「なぁスドケン
今の音の流れ使いたいな」
迷惑な事に
自分はリフレッシュしたもんだから周りのヤツに話かけだす
が
「ん〜」
とスドケンも例外なく寝ていたため良い返答は返ってこないのだった
エンコジもさして興味のないクラシックに退屈をしだしたので突っ
伏した
しかし寝ようと思うが眠れない
一時ぼーっとしていたが
南側の窓から入る風に

ゆらゆらとそよぐスドケンの金髪をじーっと見出した

それからかれこれ5分はたったか
ツナがぬすーっと体を起こした

大きなあくびと共に思い切り伸びをして周りを見まわす
右隣りのスドケンの髪を見たまま硬直しているエンコジを見てツナはビクッとした

エンコジの目はスドケンの髪を見ているようで見ていない

遠い目をしていた

ツナは肘でスドケンをつつき
小声で

「オイッ
オイッ！」

と起こした

さきほどエンコジに話かけられウトウトしている所だったのですぐに起きたが
「ん～、なんや
ツナまで」
と不機嫌感丸だしだった

起きたスドケンにツナは顎でクイックイッとエンコジの方を見るように仕向けた

頭をかきながらあくびをし
「どないやねん」
とブツクサぼやきつつ見た

「…。」

スドケンもエンコジを見て固まる

エンコジとスドケンは目が合っているハズ
しかしスドケンは

「目が…」

とツナのほうに振り返り

「…目が合えへん」

その言葉にツナが頷く

「見てみ
指がリズム刻んどる」たしかにエンコジは固まったまま
ただ指だけトットットッと小気味良く動いていた

「完璧に…」

ツナは苦笑いをしていた

しかしその顔には期待感が含まれているのも確かだった

「完璧に入った」

その言葉を聞きスドケンは冷や汗なのか寝汗なのかわからない額の汗を拭き
ニヤリとした

「井上センセには悪いが
このアホ止められへんからな」

「あぁ
リズムだけ耳に入れて覚悟いれとけ」

ツナがその言葉を言い終わるか終わらないかの瞬間

ガタッ
とエンコジが立ち上がった

そしておもむろに楽器を置いている棚に歩いていく

それは
ゆっくりかつリズミカルな足どりで

「どうした円〜？
トイレか〜？」

教卓の椅子に座ってプリントを整理していた井上が気づき声をかけるが
エンコジの耳にはまるで聞こえてないようだった

井上はクラシックのせいで聞こえないのかと思い

一時停止を押し再度
「円〜、どうした〜？」
と声をかけた
さっきよりも大きな声で言ったので半分以上の生徒が目をさまし顔
をあげる

一時停止をした井上に聞こえるか聞こえないかの声で
スドケンがつぶやいた

「ナイスやセンセ
雑音(クラシック)が邪魔や思うとってん」

モモカンとリンゴも目を覚ましエンコジを見た

エンコジはいつも使っているかのように
楽器の中からギターを取り
コンセントやシールドのついたままのアンプの電源を入れた

「アホぅ！
覚悟決まってへんぁ」
スドケンが言い残し
ガタタッとツナと席を立つ

状況を飲み込めないモモカンとリンゴはぼーっとしていたが

「行くぜ」

ツナの言葉に振り向き
次の言葉で状況を把握した

「新曲の披露＆amp;セッションだ」
モモカンが笑いながら
「えーっ！？
今ここで！？」
と小さい声で訴えた

スドケンは
口を開けたまま笑っているリンゴに言わずともドラムに行けと指を
さし

「久しぶりのゲリラライブや」

とツナと楽器棚に駆け寄った

リンゴも慌ててドラムに向かう

井上も含めクラス全体がポカンとしていた

次の瞬間
アンプから物凄い爆音が一撃鳴り響いた

ぼーっと見ていた
全員が今度は完璧に静まり返った

モモカンは出るタイミングを失って
やってしまった！！
というジェスチャーをした

「リンゴ
リズム１１０！！
ハット！！」
リンゴにエンコジが叫んだ

いつもふぬけたニコニコ顔のエンコジはそこにはいなかった

リンゴがリズムを刻む

４小説分くらいたった瞬間にエンコジが

「イントロ！！」

と叫びフレーズをかきならした

ツナとスドケンはそれぞれアンプと楽器を用意しチューニングしている

イントロを聴きながらスドケンが叫んだ

「ひゃはは！！
しょっぱなからとばすとばす！」

その言葉にニヤリとしたエンコジは
「リフ次からので行くから！！」
と叫び

「リンゴフィルイン！！」続けて叫んだ
リンゴは爆発させるかのようにドラムから音を出した
曲調は激しさを増し
ギターは上機嫌に空気を圧制していく
「悪くない」
ツナが口笛を吹き賞賛する
「っしゃ！
セッション行こう！！」
エンコジが笑いながら叫びピックをたたきつけるように弦を鳴らした
ツナとスドケンが一気に演奏に入り
音楽室はスタジオのような爆音に包まれた
口を開けて見とれているクラスの反応に
モモカンは
「ぼ、ぼくも！！」
と立ち上がった
次の瞬間
ボツッ。
という音と共にリンゴのドラムだけしか響かなくなった

井上がアンプのコンセントを抜いたのだった

「あ！！アカン
アンプイカれる！！」

反射的にスドケンが騒いだが
ヤバッと口を抑えた

「お前ら
ソッコー職員室な」

井上はかなり怒っていた

「福田ー！！やめろ！！」

井上は興奮してひたすらドラムを叩き続けるリンゴに怒鳴った

音楽室はシーンとしてしまった

第三話

エンコジ
ツナ
スドケン
リンゴ
の四人はこってりしぼられて四時限目の体育に行った
広いトラックをひたすらランニングするアップだ

「あんな怒らなくてもいいのにな」

激怒し思いつく限りの文句を浴びせてきた井上にエンコジは愚痴をこぼした

「オレなんて
オナニーを覚えた猿か！！
って言われたよ」

リンゴはへこんだ表情で地面を見た

「仕方ねぇだろ
演奏はＳＥＸより気持ち良いからな」
ツナがらしからぬ言葉を吐き
三人はバッと見た

「な、なんだよ」

ツナは戸惑って四人横列になって走っている列から少し離れた

「ツナくんもそんな事言うんだなぁ」

リンゴが口をあけて感心する

「ちゃうやろリンゴ！！

それもやけど

今ツッコミたいのはそこちゃう！！」

スドケンはツナから目を離さずリンゴにツッコんだ

「…お前エッチしたこと、あんの…か？」

エンコジが怯えた表情でツナを見た

「そや！！

そこや！！

ほんまかツナ！？」

三人はズイッとツナに詰めよった

「…お前ら無いの？」

ツナは相変わらず戸惑った顔で走り続ける

「うるせぇ～ッ！！

スケベ～ッ！！

ツナのアホチンコ～ッ！！」

エンコジが叫びながらダッシュで集団から抜けだしあっというまに

半周くらい差をつけた

「早っ」
三人はあっけにとられた顔で見届けた
スドケンはツナの肩に腕をまわしガシッとつかんだ
「で
だれや！？
あ～大丈夫大丈夫！誰にも言わへんから
ん？」
スドケンがまくしたてツナはため息をついてからコッソリ耳打ちした
スドケンは
ふんふんと頷きながら聞きだした
「うんうん…
…あ？
何っ！？
アニキの友達の！？
…！！
アミちゃん！？」
スドケンは肩から手を離し
口をぱくぱくさせてツナから離れた
「…めっちゃ美人やん」

体のそこから出たような小さい声で呟き
「実はオレもチェリーやねん！！
アミちゃんはあかんやろ～！！」
と叫びながら走りさった
「うわ～ん！！
あいつあかんわ～ッ！！
エンコジー！！」
と
半周先で肩を落として走っているエンコジをダッシュしながら呼んでいる
「待てよ～」
とリンゴも後を追い
残されたツナはやれやれと呆れた
エンコジとリンゴはともかく
スドケンまで童貞とは思わなかったな
と思いながらツナが一人で走っていると
「ツナく～ん！！」
と後ろからきっと童貞であろう
童顔でオカッパでチビのモモカンが走ってきた
「さっきのセッションぼくも入りたかったよ！！
…でも怒られちゃったみたいだね」

とニコニコしている
ツナはモモカンの顔をぼんやりと見つめ
「…なぁモモカン」
お前…童貞？
と聞こうとしたが半周先で
「うぉ～ッ！！
あみちゃん巨乳～ッ！！」
と叫んでダッシュしているバカ二人にモモカンが気づき
「アハハ
何？
あみちゃん牛乳？
意味わかんない」
と言ったので
「…。」
聞けなかった
半周先の二人は
きっと女子や人目を気にすることを知らないのだろう
「てかさ！！

みんなビックリしてたよ！！
楽器ウマいって！！」
たしかにみんなチラチラこちらを見てはヒソヒソと話している
すると後ろから
「目立ちたいからって…」
と
吐き捨て
ツナの肩にドカドカッとぶち当たり
男子の集団が走り去った
クラス委員の
遠藤幸治（エンドウコウジ）
その友達
岡田賢次（オカダケンジ）
と先程の言葉を吐き捨てた
守田綱吉（モリタツナヨシ）
だ
3人はニヤニヤしながら前をノロノロ走っている
なんだコイツら？
ケンカ売ってんのか？
口には出さずそう思い
ツナはイラっとした

普段の綺麗な顔から徐々に迫力を帯びた顔つきに変わり出す
モモカンはツナの表情を見て
あわわ～ッ！
と
こちらも口に出さずに焦りだした
普段はクールで大人しいツナだが一度キレると手に負えないのをモモカンは知っていた
地震後の大津波型のツナと暴走列車のエンコジ
瞬間湯沸かし器のスドケンが
ライブハウスでケンカを売られた時の事を思い出し
二度と怒らせちゃダメだとひそかに心に誓っていた
出来るだけトラブルに近づかないようにしているが
どうしてなのか
この3人にはトラブルを自ら招くか引き寄せる力があるみたいだ
ドドドドッ
後ろからものスゴい勢いで誰かがくる
振り返ったモモカンはギョッとして
飛びのいた

「アミちゃん巨乳〜ッ！！」
後ろから一周差をつけてきたエンコジとスドケンが叫びながら
前の三人に気をとられていたツナを突き飛ばし
勢い余って前の三人にも体当たりをした

「うおっ！！」

体当たりされた三人は予想外に飛んでいき
近くを走っていた女子の集団の中に突っ込んで一緒に転んでしまった

「きゃーっ！！」

女子が悲鳴を上げグランドのみんなが事故現場に注目する

ここで場数慣れしているものとしていないものの差が出てしまった

エンコジやツナ達は素知らぬ顔をしながら
かつ
少しビックリしたかのように第三者を気取る

突き飛ばされた三人は慌てふためき
ぶつかってしまった女子たちにひたすら謝っていた

「ちょっと！！
信じらんない
何考えてんのよ！！」

後続の女子達がワラワラとあつまり三人に詰めよる

「あ?！
円と須藤に突き飛ばされたんだよ！！」
岡田が腹を立てエンコジ達を指差す
しかしエンコジ達はいつの間にやらやじ馬の仲間達にまぎれて
「何いってんの?」
「わかんない」
エンコジとモモカンがしらを切る
モモカンもこういう事にはだいぶ慣れてきたようだ
「ぶっ殺すぞお前ら！！」
守田が腹を立て叫ぶ
しかしスドケンが
ついついッと指差し
「待ち待ち
いくらオレらが嫌いでもどさくさのセクハラまで共犯にされちゃか
なわへんわ～」
と遠藤の手が転んだ女子の尻の下敷きになっている事をセクハラと
指摘した
またもや

「きゃーッ！！」

と悲鳴をあげ
その度やじ馬がどんどん増える

三人は
クラスの大多数を敵にまわしあーだこーだ文句を言われ始めた

「ゼェゼェ…
エ、エンコジ
スドケンくん…
ハァハァ…
走るの早いから…」

エンコジとスドケンについて走っていたハズのリンゴが今頃追い付いてきた

「リンゴが遅いんや」

スドケンがリンゴの肩を叩き
ランニングに戻る

五人はやじ馬集団から離れランニングを再開した

「あいつら
相当オレらの事嫌ってるな」

ツナが長い黒髪をかきあげながら言った

「なんでだろうね」
モモカンは体操服をハタハタさせながら
首を傾げる

相変わらず爽快な青空で
太陽がゆらゆらと地面を熱している

「お前ら知らんの？
聞いた噂によれば
あいつらな…」

あっつ～
と呟きながらスドケンがそこまで言いかけると

ピピーッ！！

と遠くで体育教師がホイッスルを鳴らした

「あ
アップ終わりだ」

リンゴが立ち止まり汗を拭く

今日の体育は体育館で
男子がバスケ
女子がバドミントンだ

第四話

ダムッダダムッダムッダダダムッ

ミニゲームを見ながらみんなが好きにボールで遊んでいる

「体育館は蒸すぜ！
熱いぜ！
ダレるぜぇ〜ぃ！」

体育館の端っこでエンコジがグデンと寝そべっていた

「大丈夫かい？
エンコジくん」

出席番号が一つ前の松岡くんがバスケットボールを持って横にしゃがんだ

今日のバスケのチームわけは出席番号だ

運が悪い事に先程体当たりしてしまった守田とエンコジは一緒のチームになった

「オレ
気分が乗ってないと運動したくない」

エンコジがゴロンと寝返りをうった

ひゅ〜…
ドスッ
「うごっ…！！」
どこかから飛んできたボールがエンコジの脇腹に命中
「エンコジ〜ぃ♪」
笑いながらモモカンが走ってきた
モモカンも同じチームだ
エンコジはフルフル震えている
予想外にダメージがでかかったらしい
「何寝てんの！！
ホラ！！
スドケンとツナくんが試合してるよ！！
見なよ」
エンコジはヨロヨロと体を起こしコートを見た
確かにスドケンとツナがゲームに出ている
しかも相手は遠藤と岡田のいるチームだ
遠藤はサッカー部
岡田と守田はバスケ部だ
岡田が手慣れた感じでドリブルをしている

「きゃー！！
陣内くん！！須藤くん！！
頑張ってー！！」

体育館の半分
ネットの向こう側から黄色い声援が飛ぶ

きっと男子は一様にジェラシーを抱いているだろう

エンコジはイライラっと声援を聞いていたが
声援の中に気になる
キーワードがある事に気がついた

「頑張ってー！！
ニセコジとニセケンなんかに負けないでー！！」

エンコジは
たっているモモカンの体操ズボンを
くいっくいっと
引っ張り

「なんであいつらニセコジとニセケンなんだ？」

と尋ねた

モモカンは眉をひそめたが
かわりに松岡くんが答えてくれた

「知らないの？

彼、遠藤幸治でしょ？
中学の時エンコジって呼ばれてたらしいよ
あと岡田くんはオカケン
でも円くんと須藤くん、君達二人が目立つからあだ名取られたんだって言ってた
…ちなみに守田綱吉くんはニセツナ
…これも意味わかるよね？
ハハハ」

エンコジは
ふ～ん
と言って納得した

エンコジにとって
『エンコジ』
というあだ名などどっちでもいいのだ
なにせ本名は
『マドカトラハル』
なのだから

「へ～
だから嫌ってるんだ」
モモカンが感心しながらボールを
ダムッダムッ
と床につく

「この事を当事者の君達が知らなかったのは意外だったなぁ」
松岡くんも感心した顔で言った

「きゃーッ！！ナイッシュー！！」

突然の歓声

ツナが華麗にスリーポイントを決めたのだった

マジやばくない？

格好良すぎ！！

と雑音のように女子の高い声が宙を舞う

エンコジは目を細め

またイラっとした

「陣内くん

…スゴい人気だね

彼のオーラというか

フェロモンというか…」

松岡くんがジェラシーよりも尊敬に近い感じでツナを評価する

「きゃーッ！！

ナイスカット！！

きゃーッ！！

ナイッシュー！！」

スドケンがニセケンのボールを奪い

ジャンプシュートを決めた

すかさず女子が歓声を放る

「…須藤くんもスゴい人気だ」

松岡くんは
ほぇ〜っ
と声を漏らし
いつもかけているトレードマークの黒淵メガネをずり上げた

シュートを決めたスドケンと自陣で待っていたツナがハイタッチを
交わす
女子の声は止まない

エンコジは
ケッ
と吐き捨て
またも寝そべった

ダムッダムッダムッダムッ

ドリブルのリズムがバスドラムの音に聞こえる

「…。」

エンコジは体育館の天井を見ながら音楽室でできたあの新曲を思い
出していた

…ノリノリのカントリー系ロックに仕上げたいな

でもベースとドラムも強調させたらどうなるんだろ？
さりげにあのクラシックのフレーズも使いたいしなぁ
ツナは嫌がるだろうな…
いや
やっぱ入れたい！！
ツナは嫌がるから
モモカンのリードギターでテクニカルにキメよう
んで…
…などと考えていると松岡くんに肩を叩かれた
「次、僕らの出番だ」
いつの間にか先程のゲームは終わり
ダブルスコアでツナとスドケンのチームが勝っていた
サッカー部のニセコジが悔しそうな顔をしている横で
バスケ部のニセケンが愕然としている
「見せ場が…」
女子がワイワイ騒ぎながらバドミントンの競技に戻る

ツナとスドケンが見れたらそれで良いらしい
一試合やって爽やかに手をふってくるスドケンと
汗をタオルでふきながらこちらを見ているツナにエンコジは
中指を立てた

あんちきしょう共
うらやましいぜ

コートの中央に二列に並び
礼をした

松岡くんがチラっとバドミントンをして
こちらには見向きもしない女子のほうを見て
「よしっ！
これで緊張せずにバスケが出来るぞ！」
と意気込んでいた

そんな松岡くんを見たエンコジは
松岡くんに聞こえるか聞こえないかの声で

「松岡くん…
君は良いヤツだ…
でも、もし女子が居たとしても君や僕には元来関係ないんだよ…」
確信を得た顔をして背伸びをしていた

相手チームは
田村進一(タムラシンイチ) 谷紅葉(タニモミジ)
津地誠吾(ツヂセイゴ)
千葉一樹(チバカズキ)
と長身揃い
…そしてバスケ部期待の星
外様大輔(トザマダイスケ)
相手にまるで不足はなく

むしろこっちが約不足なくらいだ

エンコジ、モモカン、松岡くん…
スポーツ万能だが
何故か常に余裕をこいて
笑顔を絶やさない人物
何を考えているかわからない
凪沢鏡一郎(ナギサワキョウイチロウ)

体育館に入って来るのが遅く何故か同じチームに

謎の男だ

みんなが言うにはエンコジと少し顔が似ているらしい

唯一バスケ部のニセツナはエンコジを嫌っている

これはメンドくさいなぁ

とモモカンは少し困った

「なーっはっはっ！！
ニセツナ！！
まさかお前と戦うとはな！
このミスター・バスケットマンが力の差を見せてやろう！！」

カエル顔の外様が高笑いをした
外様の別名は
トノサマガエル…

トノサマガエルの言葉にエンコジと凪沢がピクッとした

「なに！？
ミスター・マスカットマン！？」

エンコジが警戒した顔でトノサマガエルを見る

「違う！！バスケットマンだ！！
そんなつぶつぶしてない！！」

「なに！？
ミスター・マスコットマン！？」

凪沢がビックリした顔でトノサマガエルを見る

「違う！！バスケットマンだ！！そんな愛されキャラじゃない！！」

「なんやて！？ミス・タバスコゲットマン！？」

休憩しているスドケンがわくわくした顔でトノサマガエルを見る
「違う！！そんな辛かない！！」
さすがに疲れたミス・タバスコゲットマン
もといミスター・バスケットマンは審判に早くジャンプボールを促した
「なに！？バスコダガマがなんだって！？」
モモカンが頭を抱えてトノサマガエルを見る
「違う！！」
と、トノサマガエルが言いかけた瞬間
審判はジャンプボールを上げた
「ゲッ！！」
不意をつかれたトノサマガエルは跳ぶ事が出来ず
ただ上を見た
ジャンプボールはニセツナが奪っていた
「ふふん
ミスターバスコダガマもたいした事ないな」
ニセツナはクルクルっと中指の上でバスケットボールを弄び

トノサマガエルを嘲笑った

「ムキィーッ！！」

トノサマガエルは素早くニセツナのＤＦにつき

「須藤も含め
キサマらおちょくりよって…」

と鼻息をフーっと荒立てる

凪沢が
「ヘイ、ニセツナ
とりあえずパス」

と手を振った

ニセツナはヒョイとボールをわたし

トノサマガエルのＤＦをかわそうとフェイントを混ぜながら相手陣営に入りこもうとする

しかしトノサマガエルのマークは徹底的でニセツナはピッタリとマークされていた

「ちっ！！」

ニセツナが舌打ちし
トノサマガエルがニヤリとしている様を見て凪沢が笑った

「ははは♪
あぁ～
唯一のバスケ部がぁ～」
なんでもこなす凪沢は
バスケも例外なく器用にこなすようで
ドリブルも手慣れていた
しかし
上手いが故にエンコジは気に入らなかった
目を閉じ
ドリブルのリズムを体で感じながら呟く
「不規則…」
もっと規則的なリズムが欲しい…
「ナギサワーッ！！」
エンコジが急に叫び
周りがビックリしてエンコジに注目する
それは相手チームも例外ではなく
凪沢をマークしていた田村も一瞬凪沢から目を離した

その隙―、

「チャぁ～ンス♪」

と言い終わらないまま
凪沢がブースターをつんだロケットのようにゴール下まで突っ込む

突然の奇襲にハッとする敵チーム

が

もう遅い

カシュッ

というネットとボールが擦れる音ともに
エンコジのチームに2ポイントが加算された

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9498g/

RRR(ローリングローリングロール)

2010年10月10日02時07分発行